

# 新陰流

古流剣術のことはよく知らなくても、おそらく新陰流という流派名は知っている人は多いのではないのでしょうか。それほど新陰流は剣術のみならず、古武道全体においても知名度ナンバーワンの流派といえましょう。因みに新陰流は柳生流、或いは柳生新陰流とも表記されることが多いのですが、正式名称は新陰流なので念のため。

新陰流の知名度を決定的にしたのは、何と言っても五味康祐の小説「柳生武芸帖」でしょう。柳生家に伝わる武芸帖の秘密をめぐって、竜造寺家、山田浮月齋門下などの人物が虚虚実実の駆け引きを見せ、これを迎え撃つ柳生十兵衛が秘剣の数々をひっさげて大活躍するというストーリーですが、東宝と東映で映画化され、特に東映版は近衛十四郎の演じた十兵衛が当たり役となって大ヒットし、シリーズ化されて人気を呼びました。武芸帖が実は全国に散らばった柳生忍者の人別長だった、というストーリー展開は、その後の「子連れ狼」における柳生封廻状（幕府への公用通信の文書が、じつは裏柳生の密書になっていた、という筋）の元ネタになっているように思われます。

新陰流の特徴は左右45度を描いて斬る、洗練された太刀筋と高度な体捌きにあります。稽古に於いて、袋撓を導入したことも特筆すべきでしょう。これは竹竿の先を細かく割って（先端に行くほど細かく割れている）、牛の革で作った袋をかぶせたものですが、これによって組太刀の中で実際に当てるのが可能になり、正確な間合い感覚を養成することが可能になったのです。

袋撓の他にも削った木刀ももちろん使いますが、新陰流の木刀は細身かつ軽量であり、これは余分な力を抜いて、刀の重みを利用するために、わざと軽い木刀を使っているのであり、こうした部分にも新陰流の剣に対する考え方がうかがえます。ともあれ、殺し合いが日常茶飯事だった戦国時代に於いて、活人剣という高尚な哲理が生み出されたことは誇るに足ることではないのでしょうか。